藤原直哉の学びのカフェ＠遠山郷　2024 年 9 月

改めて富士古文献を読む
－超古代からの歴史の決定版―

１、富士古文献とは何か

２、富士古文献が語る宇宙創成神話

３、富士山北麓を舞台にした天孫族の物語

４、日本の統一と大陸からの侵攻

５、帝都が九州に

６、新しい朝廷が橿原に誕生する

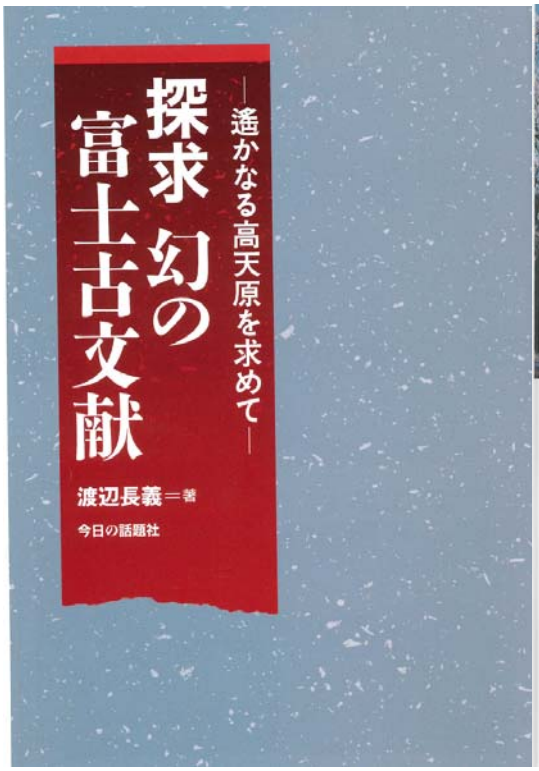
７、徐福の来日

８、聖徳太子、南朝、そして明治に受け継がれる
　　超古代からの歴史

富士古文献が語る日本５千年の歴史

経済アナリスト　藤原直哉

０、『探求　幻の富士古文献』渡辺長義著



富士山と高座山

富士吉田市大明見字日向山より見る。古代には高天原小室の里阿田都山、あるいは阿相山という。左手前に見える山裾は高座山。

高座山

上記の場所より富士山の左方、高座山を見る。山頂には、日本国創世の天神八名が祭祀される高座神社がある。

新羅三郎（源義光）［左］

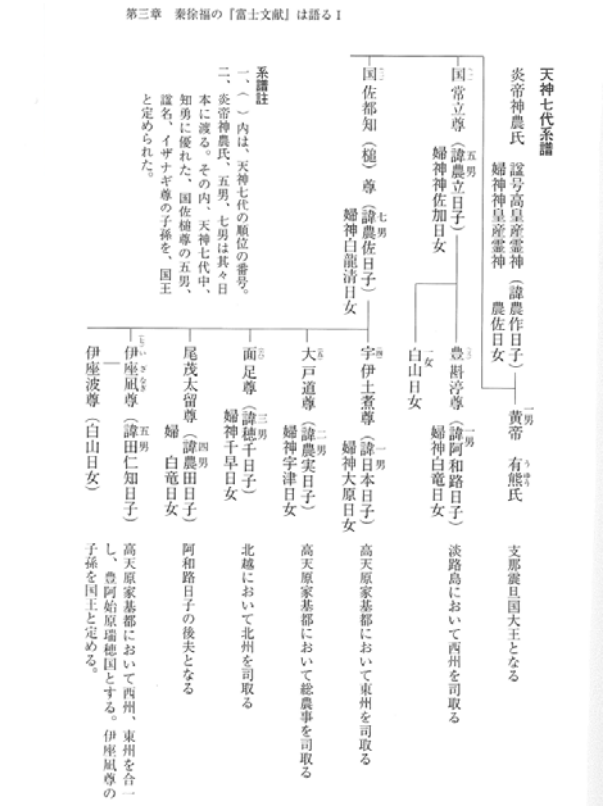
富士吉田市下吉田小室浅間神社の社宝。製作年代は大治元年（1126）ころとされる。甲斐国守の源義光は、酒折神社を現在の山梨郡里垣に移し、再興した。なお、本人は遺言により坂下（酒折）の宮に埋葬された。

聖徳太子［右］

富士吉田市下吉田、小室浅間神社の社宝である。製作年代は不明だが、鎌倉時代と推定される。太子は崇峻天皇の勅使として来駕、自画像は市内の聖徳山福源寺にある。

大日留女尊の御陵墓

大日留女尊（天照皇太神）の御陵墓とその解説板。場所は南都留郡忍野村忍草字神地、富士の名水で有名な観光地がある。



第三章　秦徐福の『富士文献』は語る Ⅰ

天神七代系譜

炎帝神農氏　諡号高皇産霊神（諱農作日子）
婦神神皇産霊神　農佐日女

一男　黄帝　有熊氏　支那震旦国大王となる

二男　豊聞淳尊（諱阿和路日子）　婦神白竜日女　淡路島において西州を司取る

一女　白山日女

三男　国常立尊（諱農立日子）　婦神神佐加日女

七男　国佐都知（槌）尊（諱農佐日子）　婦神白龍清日女

一男　宇伊土煮尊（諱日本日子）　婦神大原日女　高天原家基都において東州を司取る

二男　大戸道尊（諱農実日子）　婦神宇津日女　高天原家基都において総農事を司取る

三男　面足尊（諱穂千日子）　婦神千早日女　北越において北州を司取る

四男　尾茂太留尊（諱農田日子）　婦　白竜日女　阿和路日子の後夫となる

五男　伊座風尊（諱田仁知日子）　高天原家基都において西州、東州を合一し、豊阿始原瑞穂国とする。伊座風尊の子孫を国王と定める。

伊座波尊（白山日女）

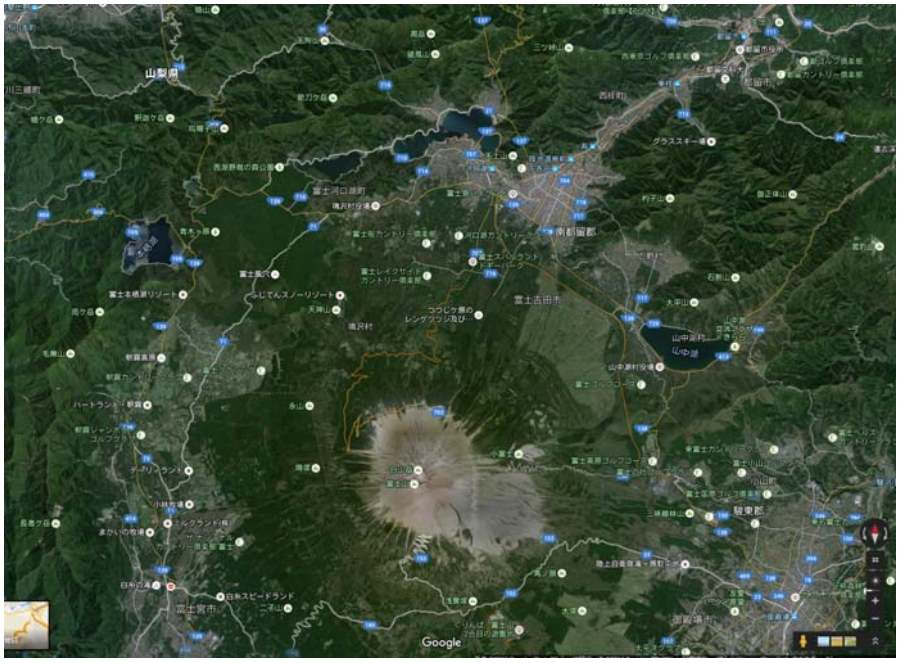
系譜註

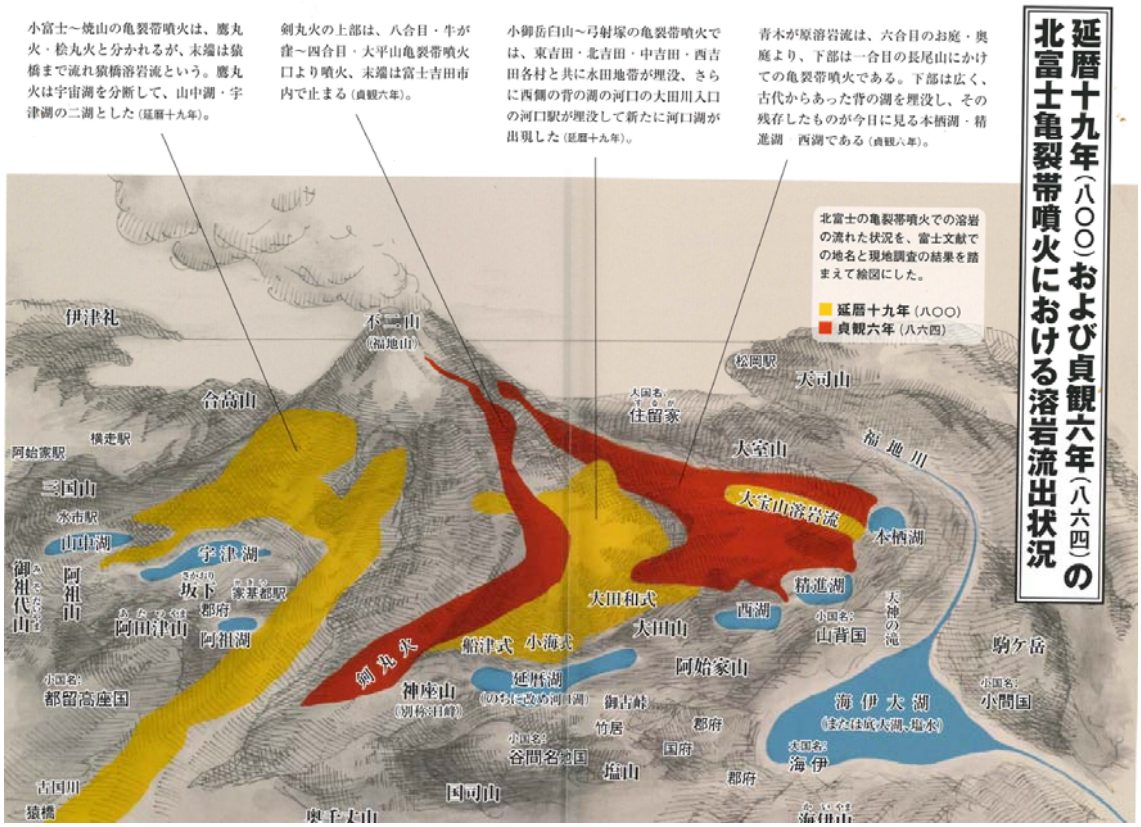
一、（　）内は、天神七代の順位の番号。

二、炎帝神農氏、五男、七男は其々日本に渡る。その内、天神七代中、知勇に優れた、国佐槌尊の五男、諡名、イザナギ尊の子孫を、国王と定められた。

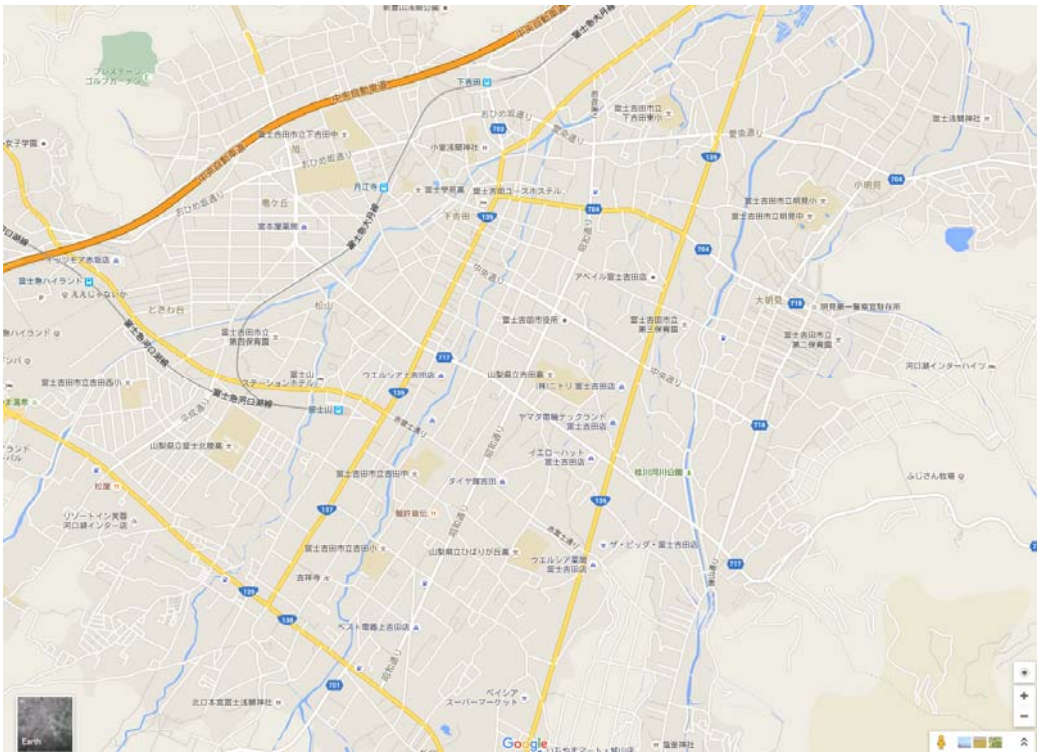
１、　富士高天原の場所

富士高天原（ふじたかあまはら）は富士山の北側の山麓に広がっていた。しかし平安時代、西暦 800 年と 864 年の富士山の北富士亀裂帯噴火で多くの場所が溶岩の下に埋没してしまった。

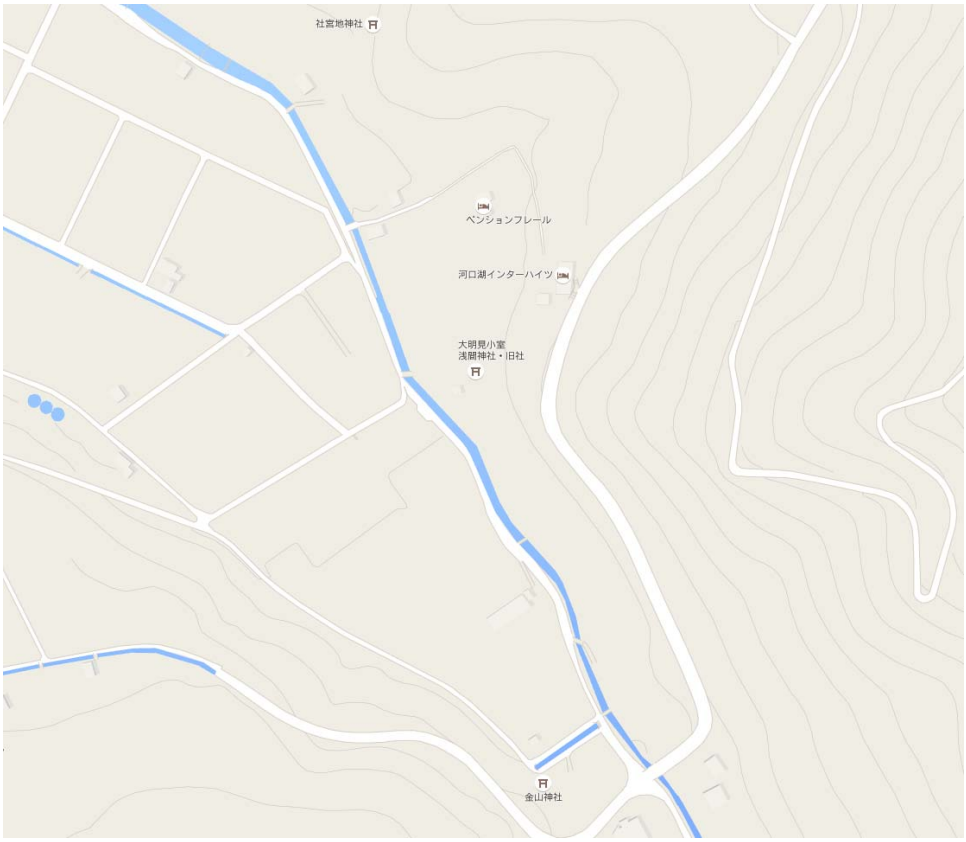




富士高天原の中心は現在の富士吉田市大明見（おおあすみ）。太古、小室（こむろ）、家基都（かきつ）といった。



富士高天原の最中心部には阿祖山太神宮（あそやまだいじんぐう）があった。現在も旧社地が残っている。



阿祖山太神宮旧社地の入り口。

これが阿祖山太神宮の旧社地の中心に立つ祠である。今でも強烈な波動を発している。

驚くべきことに遠山の霜月祭りのかぐら笛に感応した。

境内には南朝神社があり、長慶天皇も祀られている。

さらに境内には鬼門封じの神も祀られている。

地元に立っている案内板。高座山（たかざすやま）には富士高天原を創生した八神が祀られている。

阿祖山太神宮の北側の山を越えたところに明見湖(あすみこ)がある。噴火前はもっと大きかった。

忍野(おしの)村から山中湖にかけてはかつて宇宙(うつ)湖という巨大な湖があった。徐福(じょふく)の子孫が入植

都留(つる)市には山住(やまずみ)神社がある。

富士古文献によれば白山日女は伊座那身尊のことであり、加賀を平定し、加賀に祀られている。写真は石川県白山市にある白山比咩神社。

九州の 3 つの神社。宇茅不二合須朝に関係した神社。

霧島神宮

霧島・姶良

閑寂な老杉の濃い緑に包まれた参道・境内を抜けると、格調高い朱塗りの社殿の荘厳かつ豪華絢爛な姿があらわれます。
建国神話の主人公である瓊々杵尊（ニニギノミコト）を祀った霧島神宮は、創建が６世紀と古い歴史を誇る神社です。 最初は高千穂峰と火常峰の間にある背門丘に建てられたといいますが、霧島山の噴火による焼失と再建を繰り返し、500年以上前に現在の場所に移されました。現在の社殿は島津氏第21代当主（第4代薩摩藩主）島津吉貴が、1715年に建立・寄進したものです。
年間100以上の祭儀が行われ、中でも毎年元旦と2月11日に本殿で奉納される九面太鼓は、勇壮な郷土芸能として県内外から注目を集めています。
この近辺には霧島の七不思議や古宮址などもあります。

● 交通アクセス
■車
・JR日豊本線「霧島神宮駅」から約10分
・九州自動車道「溝辺鹿児島空港IC」から約40分
■電車
・JR日豊本線霧島神宮駅より霧島いわさきホテル行きバス15分

● 住所
鹿児島県霧島市霧島田口2608-5

● 駐車場
無料（420台）

阿蘇神社

エリア：	一の宮
ジャンル：	阿蘇見物
キーワード：	神社・仏閣
住所：	〒869-2612 熊本県阿蘇市一の宮町宮地3083
電話番号：	0967-22-0064
FAX：	0967-22-3463

孝霊天皇9年の創建、肥後国一の宮、旧官幣大社。阿蘇の開拓祖、健磐龍命（たけいわたつのみこと）をはじめ十二神をまつる由緒ある神社で、末社は全国500社を超える。
全国的にも珍しい横参道で、境内には願いごとを叶えてくれる「願かけの石」や縁結びにご利益がある「高砂の松」、西本清樹の歌碑がある。
一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門の6棟は国の重要文化財に指定されている。
また、楼門は日本三大楼門の一つに数えられる。

国造神社

エリア：	一の宮
ジャンル：	阿蘇見物, お役立ち
キーワード：	観光名所, 神社・仏閣, 歴史・文化施設
住所：	〒869-2601 熊本県阿蘇市一の宮町手野2280
電話番号：	0967-22-2476
FAX：	-

健磐龍命の第一子、国造速瓶玉命（はやみかたまのみこと）をはじめ四神をまつる由緒ある神社。
境内には元国指定天然記念物の「手野の大杉」が保存され、市指定のホオノキや高本紫溟の歌碑がある。

2、　　阿間都州・阿間野世七代

太古の須弥山（しゅみせん）を天竺（てんじく）という。人種 4 種。パミール高原西側で古代文化を成していた民族か。

一代　天日野穂火夫神・天日野穂火母神

七代　阿日野身波志羅比古神・阿日野身波志羅比女神

3、　　天竺震旦国（しんたん）・天之御中世（あめのみなかのよ）一五代

一代　天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）・天之御中比女神

五代　天之常立日子神（神皇日子）・天之常立日女神（弥真加身日女）

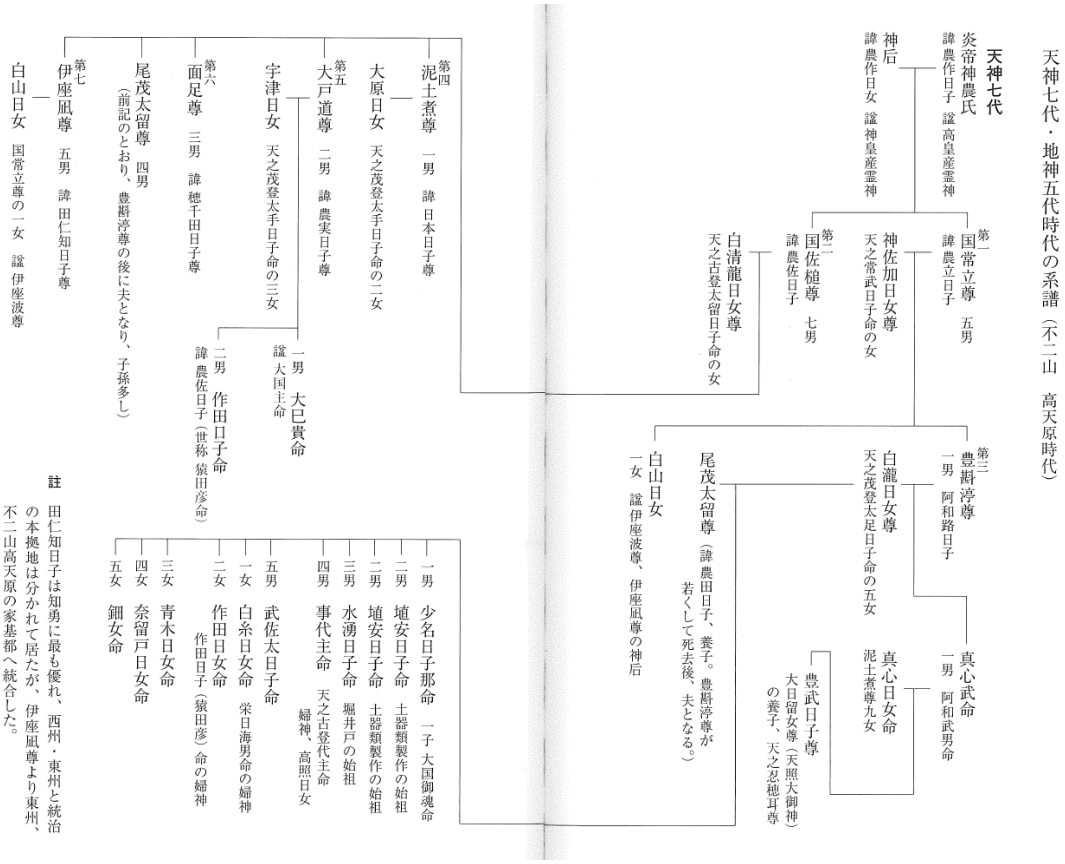
十五代　天之神農氏神（農作日子）・天之神皇比女神（農作日女）

五代から諡（おくりな）を始める

天之御中主神は家畜と農耕による食糧生産を黄河流域の原住民に教えた

天之御中主神は酒を造る。塩を作る

4、　　炎帝神農氏（えんていしんのうし）等の来日



紀元前 216 年に秦から来日した徐福がまとめた『徐福十二史談』が語る。

天都州より、大昊伏義氏は東洋婦人と共々、大陸の大中原に天降り、炎帝神農氏を生み、山海夫人を妻にして、七男九女を産んだ。

一男　黄帝有熊氏…大陸の大皇帝となる
二男　朝天氏…東洋婦人を妻にして東州を治める
五男　農立氏…父の命によって東州を巡回の時、東海に蓬莱山をみつけ、500 人の眷属を従え日本に渡り帰らず
七男　農佐氏…五男農立氏が帰らないので神農氏と共に 700 人の眷属を従え日本に農立を訪ねに行く。日本に渡り帰らず

神農氏は大船団を組み、朝鮮半島沿いに対馬に渡り、北九州から佐渡に行き、能登半島に上陸。それより北アルプス山脈の山に登り、はるか遠くに富士山を発見。さらに船団を組んで海岸沿いに瀬戸内海を経て駿河湾に上陸。富士山を周遊し、富士山の北麓に都を定めることとした。命名して家基都という。紀元前 2600 年ごろの出来事である。

神農氏の諱は農作日子といい、自ら土地を耕して農作物を栽培し、生活の基盤を作った。日本の農業の始まりであり、狩猟生活からの転換だった。

また農作日子は文字を作り、子孫に伝え、また瞽を集め、百草の試食試飲をさせて漢方医薬の開祖と仰がれることになった。

一方農立日子は富士で神農氏、農作日子と再会。互いに「座賀見」と言った。その後、妻子と眷属がいる淡路島にとどまった。農立日子の諡は国常立尊、妻神の諡は国常日女尊。これが高天原世、天神七代の始まりである。

農佐日子夫婦は富士高天原にとどまった。大鶴、大亀が住み、大松があった。夫婦は大松の下に鶴亀を愛して住んだ。農佐日子の諡を国佐槌尊、農佐日女の諡を国佐日女尊という。

国常立尊の一男を
阿和路日子、諡を豊斟渟尊といい、淡路島で西州を司る。一女を白山日女、諡を伊座那身尊という。北越の諸国に大賊が起こったため、賊退治のため丹波国真井原の要害堅固の地に宮を造営する。この宮を桑田の宮という（亀岡）。

北越、山陽、山陰の諸々万の悪神を退治し（桃太郎伝説の起こり）、良農神を助け、農民は御国の大御宝と崇め、毎日朝夕神殿において農民に怠りなく拝礼。国々豊かに。

白山日女は父神、国常立尊の副帥となり、良民をよく愛した。北越・山陽・山陰の総国民、白山日女が止まっていたところを家賀野と呼んだ。夫婦で不二高天原に帰ったのち、白山日女がいたところ、家賀野原の家賀山の石川のほとりに宮を造営し、白山日女尊の御霊を祭祀し、崇敬した。

国佐槌尊の一男を日本日子、諡を宇伊土煮尊といい、家基都で東州を司る。

国佐槌尊・国佐日女尊の五男が田仁知日子、諡が伊座那木尊。国常立尊の一女伊座那身尊と夫婦になり、東州と西州を合わせて豊阿始原瑞穂国を開く。国佐槌尊と国佐日女が高砂の翁と姥である。

５、　　天神七代

富士高天原の中心には阿祖山太神宮があった。さらにその東側には標高 1597 メートルの御祖代山、今日の名前で御正体山、杓子山がある。これを古代は阿祖山といった。

さらに杓子山の峰続きを宇宙峰といい、標高 1141 メートルの高座山がある。高座山のふもとには宇宙湖があった。忍野村から富士吉田にかけての大きな湖。

高座山にはわが国創建時代の八神が高座神社として祀られている。

１、炎帝神農氏・農作日子の諡を高皇産霊神という
２、その妻神・農作日女の諡を神皇産霊神という
３、その五男農立日子の諡を国常立尊という
４、その七男農佐日子の諡を国佐槌尊という
５、国佐槌尊の五男の諡を伊座那木尊という
６、その妻神の諡を伊座那身尊という。白山日女。国常立尊の一女
７、伊座那木尊・伊座那身尊の一男の諡を月夜見尊という
８、伊座那木尊・伊座那身尊の義子を多加王といい、諡を祖佐之男尊という。多加王は新羅王の四子。炎帝神農氏の二男朝天氏の子孫。大日留女尊、月夜見尊とは義兄弟

国常立尊、国佐槌尊の子孫を天津神と定める。天之常武日子の一男、茂登太手日子と元太足命の子孫を国津神と定める。

天津神は国法を定める。大政頭は天津神の子孫。洞、沢、組を定める。

天津神は、洞、沢、組の頭を務める。

大神の左右に守神を置く。これを頭神と定め、茂登太手命の子孫が左頭神、元太足命の子孫が右頭神を務める。

親子、兄弟の混淆を禁止。親子、兄弟、伯父、伯母、子孫の礼儀を定める。さらに大御神をはじめ、天津神、地祇の礼儀を定める。

衣服は柏木の葉、芭蕉の葉、常盤木の葉、そのほか、万の木の葉を集め、葛葉の蔓で結びつけて衣服とすることを示す。

衣服には催(もよおし)をつけて上頭、中頭、下頭の区別をつける。

上頭の神は、常盤木の実を藤の蔓にたくさん通して首から下げる。
天津女神は、夏目の実を藤の蔓にたくさん通して首から下げる。
国津女神は、カヤの実を藤の蔓にたくさん通して首から下げる。

すべてのものを数える方法を定める。小さい木を小さく割り、一、十であらわす。

悪魔退治。竹に髪の毛を撚り、蔓に張って、細竹の矢をもって退治することを四方の州に示す。

伊座那木尊・伊座那身尊の一女、諱、大日留女尊(おおひるめのみこと)。四方州の総大御州を治める。神武(じんむ)天皇から天照大神(あまてらすおおみかみ)の追諡を受ける。

伊座那木尊・伊座那身尊の一男、諡、月峰命(つくよみのみこと)。四方州の総大御山を治める。

伊座那木尊・伊座那身尊の二男、諡、蛭子命(えびすのみこと)。四方州の総海を治める。

伊座那木尊・伊座那身尊は毎夜山に登り、火をたく。神祖以来のこと。高燈大明神(たかとうだいみょうじん)。

６、　　地神五代・豊阿始原瑞穂国(とよあしはらのみずほのくに)

地神五代

伊座凪尊　神后・伊座波尊

一代
大日留女尊　一女、幼名・大市日女、諱・大日留女尊、諡・天都大日霊神、後世の諡・天照大御神
月夜見命　一男、幼名、太良、諱・月峰・月夜見命――男大山祇命
　婦神・葦津日女、諱・月桜日女、泥土煮命之一女
栄日子命　二男、幼名仁良、諱・蛭子命、改・江日住命、諡・栄日子命
　婦神・静波日女、諱・白糸日女、尾茂太留尊之一女
祖佐男命　義子、諱・多加王、新羅王、四男、賜諱・祖佐男命
　婦神・八佐加日女、諱・稲田日女、手名槌命之一女

二代
天之忍穂耳尊　養子、豊斟渟尊、嫡孫、真心武命一子、豊武日子
　神后　栲幡日女、祖佐男命一女

三代
天都日子仁仁木尊　一男、幼名武雄日子、諱・仁仁木尊
　神后・木花咲耶日女、幼名・菊里日女、阿田都日女、大山祇命之二女
太真祖命　二男、玉祖命、賜伊須国、伊東阿田見原之日金宮
　婦神・岩長日女、大山祇命一女

火照須命　一男、幼名・海佐知日子、諱・阿曽武男命、隼人日子命
　婦神・大住玉日女、諱・瀬湖津日女、天太玉命　三女
火須勢理命　二男、農佐知日子、諡・太田知穂命
　婦神・太田穂桜日女、諱・金桜日女、天児屋根命之二女

四代
日子穂々出見尊　二男、火遠理命、幼名・山佐知日子――
　神后・豊玉日女、豊玉男命一女、改諡・石割日女尊
　後神后・豊玉日女、姪・多摩夜里日女尊

五代
日子波限武宇茅葺不合尊　一男、幼名阿祖男又は家基主命
　神后・幼名阿祖日女、多摩夜里日女尊
天別天之火明命　二男、尾張田原之国造
三穂武男命　三男、幼名若武日子、北越・山陽・山陰地方を治む
阿田都日子　四男、高天原宮守

註
以上、地神五代まで不二山（富士山）高天原の家基都に居たが、支那震旦国の国王舜帝有虞は、仁仁木尊の時代に侵攻し、その後、火火出見尊の時代と再度筑紫（九州）へ侵攻して来た。こうしたことから防戦は、筑紫島へ遷都して居ながら防ぎ戦うより方法なしと、合議の上決定した。よって、地神五代の波限武鵜茅葺不合尊に譲位し、伯父の海佐知日子（火照須命）の勘気を赦免して西征の総元帥となし、二〇八千余神の軍勢をもって筑紫の日向の高千穂宮へ遷都し、賊の大軍と戦うこと日夜合せて六百五十日にして、遂に賊軍を北西方面に追放した。これより、わが国の首都は筑紫の高千穂宮に移り、神皇は五十一代続くが、わが国の既刊本、歴史大系では脱落している。
なお、尊は国王、国事・国政は左右両大神が付き行われた。

第一代　天都大日留女尊

大日留女尊は独身。四方の国を取り司り、豊かに国を治めた。
藤蔓の皮を集め、さらしてたたいて衣類を作ることを始め、四方の諸万国に示した

大日留女尊の在世中、新羅国王四男の多加王、眷属 300 人を連れて不二高天原に来て、大日留女尊を妻として瑞穂国を取ろうとした。大日留女尊は従わなかった。

多加王は大日留女尊の妨げばかりするので大日留女尊は岩戸に隠れた。現在の石割山・石割神社。そのために瑞穂国は闇国になった。眷属 8 千人が集まって多加王を生け捕る。眷属は皆殺し。うずめ女尊が祝いの舞を舞い、大日留女尊は宮に帰る。

多加王に道理を諭し、大日留女尊を姉とあがめ、姉弟の契約を結ぶ。手形を柏葉に押して大日留女尊にたてまつる。これが瑞穂国の印形の始めである。

多加王は西北の国に流す。富士山より出でる雲になぞらえて、悪魔を流した国である

ことから、ここを出雲国と名付ける。

月峰命の子孫、山住命は工夫に工夫を重ねて名剣を作る。さらにその子、八角鏡と宝司の玉をつくる。それを多加王に献上する。

その後、多加王は北陸のもろもろの悪神を退治。諱、祖佐之男尊を授かる。

祖佐之男尊は宝司玉、名剣、八角花形之鏡を大日留女尊に奉る。

大日留女尊は玉を神霊と名付ける。剣を室雲剣、あるいは宝剣と名付ける。そして八角花形の鏡は内侍所の鏡と名付ける。そしてこれらを三品之御宝と定める。

そして大日留女尊は多加王に勅命を申し付ける。四方の島々国々の諸万の悪魔を退治せよと。さらに古の玉、剣を神霊として多加王に授ける。祖佐之男尊は大軍を四方の島々に送り、四方島々、州国、海外四海、波静かに治まり、天下泰平の御代となった。

さらに田畑の開墾を行った。穴居を止めて木で家を作らせた。牛、馬、鹿を名付けて利用した。火を炊く方法を四方に伝えた。土で鍋、釜、食器を作らせ四方に伝えた。井戸を掘った。鉄を焼いて鍛えて剣、鉾を作った。臼と杵を作って、米、粟、麦、稗を精製する方法を発明し、四方に伝えた。網を作り、海の魚を取る方法を発明し、四方に伝えた。

伊座那木尊の子孫を皇族と定め、世継ぎがない時は天津神と相談の上、皇族のうちから選ぶこととした。

洞、沢、組などを廃し、大国、小国、大村を置いた。国造、郷司、村長を置いた。

豊斟渟尊の子孫を大国造首之家と定め、泥土煮尊の子孫を小国造首之家と定めた。さらに面足尊の子孫を大村司の之家と定め、大戸道尊の子孫を小村長之家と定めた。大巳貴命の子孫を租税を収納する家と定めた。作田日子命の子孫を農神首司之家と定めた。正哉山住命の子孫を山守を司る家と定め、栄日子尊の子孫を海を司る家と定めた。

大日留女尊は、豊斟渟尊の孫、実は阿和武男の子、豊武日古命を養子にし、祖佐之男尊の一女雲津日女を見合わせ、三品の御宝を添えて位を譲った。

祖佐之男尊の一女出雲姫を桑田の宮にとどめて、豊受太神宮の守護を申し付けた。この姫は人々から生き神だと敬われた。死後、御霊を出雲大明神として祭祀する。

国法・国制を定め、背く神々はみな出雲に送り流し、みな祖佐之男尊の裁きを受け、監督を受けた。これを天獄と名付けた。祖佐之男尊の説教、説諭に応じ、善神に返った神々は千日、または二千日の見ならしを見て赦免した。また千日ごとに 30 日間は天都、国津神、四方の国より出雲国大社に集まり来た。諸々万の罪神に説諭説得の上、諸々万の罪神の罪を論じ、評議一決し、神々が帰るのがしきたりと定めた。

宇家屋不二合須世、神皇 33 代の時、出雲の国造祖海男の二男、武長刀彦、尾張国の入浜、出張り崎の津島に、東南の諸々万の国の諸々万の罪悪神を集め、これを武長刀彦命、官長となり、ここを日本総天獄と名付ける。そしてここに官長、諸神々が集まり、説教、説諭する大廟を日本総社と言った。そして出雲大社を陰大社、尾張日本総社を陽総社とも言った。

なお、第 1 代宇茅葺不合尊のとき、豊受太神宮の守護神の妻神は代々、祖佐之男尊の一族より娶ることが決まる。後に人皇 21 代、雄略天皇の時に豊受大神を伊勢国渡会の山田浜に移した。これが伊勢外宮である。

大日留女尊の埋葬場所は忍野村忍草の富士浅間神社の境内である。年齢は 42 歳だった。

蛭子命、諱栄日子命の家は今の青木ヶ原に昔あった背の海のほとりにあった。この大湖は西暦 800 年と 864 年の富士山の噴火によって埋まり、西湖から本栖湖の現在の形になる。しかし蛭子命の子孫は繁栄し、後に九州に移るが青木ヶ原には同神を祀る背の海神社があり、地名の根場も今日に残っている。

第二代　天之忍穂耳尊

四海平和に治まり、真藤を製造し、蓮の糸または万の獣の毛を集めて機織りをすることを発明し、四方に伝えた。

一男（のちの仁仁木命）は気が強く暴れて手に負えず、出雲の国の祖佐之男尊に預けて育てた。

祖佐之男尊は出雲の大社で亡くなり、鳥上山に葬られた。

仁仁木命は不二高天原に戻り、皇位を継承する。妻神は阿田津日女命（あたづひめのみこと）、幼名は菊里日女（くくりひめ）。

33 歳にて没。

第三代　天津日子仁仁木尊（あまつひこにぎのみこと）

このとき、大軍が筑紫島（九州）に押し寄せる。紀元前 2258 年から 2206 年の間。攻め込んだのは中国の帝舜（しゅん）、有虞（うぐ）氏。黄帝より 5 代目。大暴風で全滅。ここまでが中国の三皇五帝時代。

仁仁木尊らは作田日子命を道案内に、武甕槌命（たけみかづちのみこと）、武御名方命（たけみなかたのみこと）らを軍大将にして、神霊の玉を身に添え、室雲の宝剣を持ち、妻神・阿田津日女命は御鏡を身に添え、西国に出発。周防に関を立てて筑紫にある賊の大軍を防ぐうち、賊は南島（四国）に移ったので、軍勢も南島に移した。

阿田津日女命自身、軍の大将となって四国で戦い、賊の大軍をみな追い払う。そのとき、父母が日女をこがれて不二高天原より西国に尋ね行くところ、母、加茂沢日女、病死。伊豆浜に葬る。ここは三島という。諡は別雷命（わけいかづちのみこと）。

父、正哉山住命（まさかやまづみのみこと）は、四国で阿田津日女命と巡り合う。しかし妻に焦がれ、三島に行くよと言って現地で没する。そこで伊依（いよ）国と名付ける。諡は大山住命。神霊は三島明神という。

須弥蓬莱山島（しゅみほうらいさん）、豊阿始原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）は、全世界開闢（かいびゃく）の始めの祖々神の止まり座ます御国なるによって、租々神方の神罰なりと、大陸を始め、四方の諸々の国人みな恐れ給うなり。

仁仁木命は筑紫の賊を平らげ、南島に渡って阿田津日女命と対面した。その時、妻神が産月となっているのを見て仁仁木命は疑い、妻を恨んだ。仁仁木命が再度九州に渡ったので阿田津日女命は驚き、不二高天原に帰った。このことを作田日子命は天児屋根命（あまのこやねのみこと）に語ったところ命は驚き、共々不二山に帰った。

阿田津日女命は夫に疑われて生きていられるかと。自分がはらんだ子供よ、生きていれば火のなかでも寿命を保ち、夫の疑いを晴らせよと言った。そして川合の真佐小砂の小島に無戸室をつくり、産屋として 3 人の子を産み残し、自身は火中に飛び込んで死んだ。天児屋根命、作田日子命が駆けつけてみれば火煙と共に焼死していた。しかし火煙のなかに産まれた子の泣く声がした。子を助けようと火煙のなかに飛び込んだが火煙がます

ます強くなり、不二山は煙の中に消えてしまった。天児屋根命は麓に降り、無戸室の屋根を破り、3 人の皇子を出した。作田日子命に言って猿の乳をとって子に与えた。天児屋根命らは遺骨を拾い集め、宮に納めた。多くの神々は仁仁木命を限りなく恨んだ。

四方の諸国がみな大騒動になったために天児屋根命と事代命は鹿に乗って西国に行き、仁仁木命に事の次第を伝えた。すると命は大いに驚き、高天原に戻り、諸国を鎮定した。妻神が亡くなったところは忍野村忍草字臼久保。寄生火山でできた小山。無死骸原は梨ケ原。投身した噴火口付近を野燃太。現在の山尾田。

妻神の諡、木花開夜姫命。これより仁仁木命は諱名を金山男命と改める。木花開夜姫を葬った場所は御座野原。現在の富士吉田市小佐野。上吉田集落の前身地。金山は語源的には「家の根元の山」ということから家根山という。現在の鐘山。

産まれた 3 人の皇子の名を定めた。
最初の子は火照命
次の子は火須勢理命
3 人目の子は火遠理命

また妻神の魂が止まった霊石を取り出した大力男命は、諡を石凝姥命とした。

さらに金山男尊は西国の大合戦の軍功を定めた。
左大臣、天太玉命の子孫一族を祖賀家と定め、天下大政を司る家と定めた。
右大臣、天児屋根命の子孫一族を物部家と定め、天下諸大政を司る家と定めた。
塩土郎翁命、豊玉日子命の子孫一族は西筑紫島一円守護司役。
興玉命、味耜託日子命の子孫一族は南島一円守護司役。
玉柱屋命、大物主命の子孫一族は西中国守護司役。
経津主命、武甕槌命の子孫一族は東国守護司役。
大国主命、事代主の子孫は北国守護司役。
稚武主命、建御名方命の子孫一族は北中国守護司役。
さらに建御名方命の子孫一族は鹿に乗って四方諸万国を駆け巡り、先頭に進む軍大将の家と定める。また稚武主命の子孫一族は馬に乗って四方諸万国を駆け巡り、先頭に進む軍大将の家と定める。
石凝姥命の子孫一族は軍事用武器を作る家と定める。
数の数え方を改め、一二三二二十を廃して一二三四五六七八九十とした。また一十百千〇の丸を廃して万と改めた。
また数を数えるために小さな木の丸太を短く折り、これを後世算木と呼んだ。

3 人の皇子は金山男命に生き写しだった。妻神に焦がれながら没。44 歳。諡天津日子仁邇芸命。

火照命は海狩を好み、海佐知日子と呼ばれた。
火須勢理命は農作を好み、農佐知日子と呼ばれた。
火遠理命は山狩を好み、山佐知日子と呼ばれた。

ある日、火遠理命は兄火照命に釣り針を借りて魚釣りをした。ところが魚は一匹も釣れず、しかも釣り針を失ってしまった。兄火照命は許さず、火遠理命は途方に暮れて西の背の海の浜の龍宮に行った。そして小舟に乗って海神の司首の宮に行った。そこで父神に事情を話して留めてもらい、一女をもらった。海神の司首は伊座那木尊の第二皇子、栄日子命である。栄日子命の別名は竜王といい、住む家を宮という。これを略して竜宮という。

第四代　天津日子火火出見尊
仁仁木尊の遺言により、死後左右大臣に相談の上、天児屋根命、作田日子の命を道案内として西瀬の湖の北、日向山の麓の浜の龍宮へ、火遠理命を迎えに行く。

海神の司より一美女、豊玉日女をもらいうけ、妻神とする。火遠理命の諱名を天津日子火火出見命、妻神の諱名を豊玉日女命と名付ける。

さらに天児屋根命の子として、三品の御宝を捧げて位につく。

青木ヶ原には現在も背の海神社があり、祭神は栄日子命で、水神様の本社として古来崇敬されてきた。

豊玉日女命、まもなく出産のため慌てて南宇宙湖、出張島に産屋を造る。現在の富士急マウントホテルの山。

鵜の羽で産屋の屋根を葺き終える前に皇子が誕生した。皇子の名前は阿曽男命、またの名を家基都王命。この産屋を宇浜宮という。別名は産屋が崎。皇子 5 神、皇女 7 神あり

ある日（即位後 22 年）、筑紫から早馬で、三漢方面より大軍が筑紫島に攻め来たとの早馬が来る。

日子火火出見尊は三品の宝を捧げて皇子阿曽男に位を譲った。

その後も筑紫島にはたびたび攻められたので神都を筑紫に移し、筑紫にいながら防ぐしかないとして、不二山の地名を取って筑紫の国の要害の地、日向高千穂に神都を設けた。

そして火照命を総軍帥とし、武甕槌命、経津主命、建御名方命、稚武主命の 4 軍帥を副帥として、2 万 8 千神の軍勢で出発した。36 日で周防の宮に到着。

軍勢を二手に分けて東と南から攻める。南からの軍勢が敵を北西に追い払い、霧島山より西大山に本陣を移す。この大山を阿曽山と名付けた。

少名日子那命、外交と国家に功績。尾張州中島里に葬った。
その子、久延仁日子命、諡、大国御魂命。中島に葬った。
妻神、下照日女命も大功を立て、尾張海部里に葬る。諱、大国御魂日女命。
その子、阿曽武命、海軍総大将。敵船団と共に戦死。諱、健磐龍命（たけいわたつのみこと）
その妻神、諡、阿蘇日女命。

これより霧島山を神都と定め、日向高千穂山と名付けた。
高天原より神皇が御幸したときに屋根が吹き終わっていたので、日子火火出見尊の詔により、神皇の諱名を鵜茅葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）と名付けた。

神后は玉依里日女（たまよりひめ）。

そして今度の軍功を定め、陸軍の総戦死者の霊を霧島山に祀り、霧島神社する。
阿曽山に海軍総首領のご夫婦の神を祀り、健磐龍命神社とする（現在の阿蘇神社）。
海軍兵諸々の戦死者を合わせ、国造神社とする。

これより天都高天原では神託を授かり、位を授けるところとする。また国の重要な出来事を記録するのも天都高天原である。それは文字を伝える三十六神家の任務。

またこれより国の名を、宇家弥不二合須国、と定めた。
神皇の諱名は代々、鵜茅葺不合尊と定めた。
神后の諱名は代々、玉依里、女尊と定めた。
諡は代々、宇家弥不二合須尊、宇家弥不二合須比女尊と定めた。

豊阿始原瑞穂国の実年数はおよそ 69 年間。

7、　　宇家屋不二合須世（うがやふじあわすのよ）

鵜茅葺不合尊の系譜

神皇第五十代　鵜茅葺不合尊　岩仲彦王尊

- 第五十一代　一皇子　同右　弥真都男王尊
- 大久米王命　二子
- 高座日多王命　三子
- 高知彦王命　四子
- 岩高彦王命　五子
- 倉立彦王命　六子
- 熊山彦王命　七子
- 高見香具山王命　八子
  - 一男　海津彦五瀬王命　皇太子
  - 二男　天津稲飯王命
  - 三男　三毛野入野王命
  - 一女　種五媛命、可美真手命妃
  - 四男　神武天皇、皇太子、日高佐野王命
  - 五男　阿田美椎津彦王命
  - 六男　高倉日本王命
  - 七男　経身大久保王命
  - 二女　武熾媛命、天日方奇日方命妃

第１代宇茅葺不合尊は不二山高天原から筑紫島に神都を移す。大陸の敵軍を追い払い、筑紫を鎮め、平和になる。

文字は、神農氏の時代より、モノの形を文字として使っている。

日子火火出見尊の時代、神々の遊び場所の山を神山という（現在の足和田山）。諡は天都日子穂々出見尊という。

神皇は勅命で、神皇神が死去したら皇太子が位につくことを定める。また神后の存命中は神后が政治を取ることを定める。これを摂政と名付ける。

12 代、14 代、大陸から大軍が攻めてくる。

17 代、底大湖の南西の山沢を掘り下げ、湖水を流す。大湖 2 分減水。竜王水神を崇められる。

24 代、外冦の船数百隻海上に出現するが暴風でことごとく沈没。紀元前 1667 年頃。中国の商、大庚王。

28 代、不作、盗賊蜂起。

33 代、殷国の紂辛王、周の武王に滅ぼされる。紂辛王の三男、対馬王、日本に亡命。時に十二支十干の暦書を奉呈。

41 代、南海に海賊蜂起し、農民被害多し。

49 代、南島に新羅人、土蜘蛛らと計画し、大賊蜂起する。南島大地震あり。

50 代、凶作が続き、餓死者多し。不二山高天原から神霊を霧島山に移し、阿蘇山と命名する。

51 代、弥真都男王尊、大国十八州に初世太記頭(はせたきがしら)を任命。東周国 17 代威烈王（紀元前 425－402）の扇動により、紀伊国の初世太記頭長脛彦(ながすねひこ)を総司令に反乱が起き、戦乱が十数年続く。威烈王の父、考王、長子の安王の三代 75 年にわたって大軍を集め、軍船をたくさん作って祖国の蓬莱山島豊阿始原の瑞穂国を攻め取り、全世界の大王となる目的をもって侵攻。

この間、皇太子の五瀬王戦死。第 4 皇子の日高佐野王が皇太子となり、反乱軍を鎮圧。長脛彦は津軽まで、東周国の新羅人敗残兵共々逃亡する。弥真都男王尊は戦乱中伊勢にて病死。暗黒の世となる。戦乱は皇軍が勝利。賊を鎮圧し、日向高千穂宮より山表(やまと)（日の大和）へ遷都。初代、神武天皇という。

皇太子日高佐野王尊に波限建神日本磐余彦火火出見天皇(なぎさのたけるかむやまといわれひこほほでみてんのう)という諱名が授けられ、三宝の御宝を授けて即位。

暗黒の世が終わり、天照国となったことで国名を大日本と改め、年を紀元元年と定め、2 月 21 日を紀元節と決めた。

ただし中国史の年表により神武天皇即位は紀元前 420 年の辛酉(しんゆう)の年。日本史の紀元前 660 年の辛酉の年とは 240 年異なる。

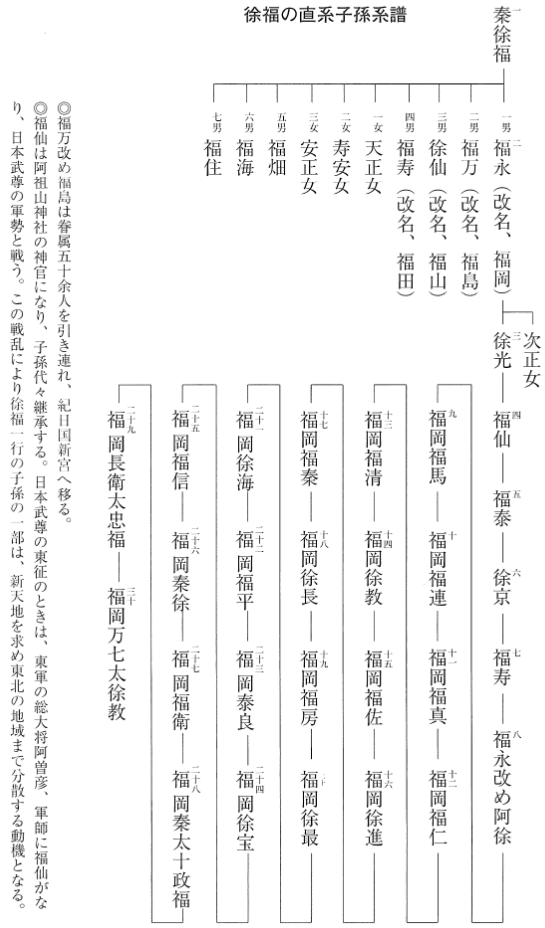
天皇は即位 4 年に家基都へきて、往古の天神七代、地神五代の神々の陵墓に参詣

し、特に大日留女尊には、天照大御神と追諡。

東海道の最初の目的は、神武天皇のとき、大和から不二高天原の阿祖山神社に参拝のため.

また天神七代、地神五代の時代から世襲する国事の記録、ならびに諸々の神社用務に奉仕する家を三十六神戸に定めた。天皇の諡、神武天皇。

8、　　秦国徐福集団の渡来と神武天皇以降



徐福（じょふく）。紀元前 218 年、孝霊天皇の時代、秦の始皇帝を欺いて老若男女五百人余りを従えて日本に渡海。渡海者の名簿が残っている。

琅邪（ろうや）人。現在の江蘇省連雲港（れんうんこう）市。7 代前の祖先の子路（しろ）は孔子の門人筆頭者。徐福には男子 7 人あり、一男を福岡、二男を福島、三男を福山、四男を福田、五男を福

畑、六男を福海、七男を福住といって、七カ所に分かれて子孫繁栄。日本国中に広がる。氏人の数が多く、氏も極めて多く、奥羽から九州まで。

東海の蓬莱山島は全世界の大元祖国で、大元祖の神々が止まる国。長生不死の良薬あり。

徐福は渡海のおり不二山を見失い、筑紫、南島を訪ね回り、紀伊国の大山に登り、3年3か月いた。久真野山。二男の福島、大山を開く。不二山を本宮。久真野山を新宮という。不二山と久真野山の交際深い。

その後、数千人の移住。連雲港市から北上。山東半島最東端から朝鮮南部に。そして対馬から九州へ。

徐福文化が入ってきて日本は造船、農耕経済、農業が発展。階級的生産も。縄文末期、弥生初期に階級社会に入り始める。

業務の第一は蚕子、幡織り。第二は農夫のほか、大工、壁塗、猟人、紙師、紙すき、笠張、楽人、仙人、衣類仕立工女、酒製造夫、醤油製造夫、油製造夫、鍛冶夫、鋳物師、諸細工夫、医師、石工夫、塩製造夫、そのほか一切の諸職夫を連れてきた。

さらに神道学、神仙、道学、医学、薬学、占易学、煉丹学、古詩、歌、楽器、舞踏などが一度に渡来。

秦姓、福をつける氏姓、地名はみな徐福の子孫、また共に来た五百余人の子孫の印

秦氏は財政に貢献。雄略天皇の時、大蔵を創設。稲荷は秦氏の氏神。殖産興業の氏神となる。松尾神社、上下加茂神社の発展も秦氏に追うところが多いだろう。松尾神社が酒の神となったのは秦酒公との関係。筥崎(はこざき)宮、讃岐の一宮など、秦氏を大宮司とする神社が西日本にもとても多い。仏教にも貢献。

三十六神戸の記録を集大成。『徐福十二史談』編纂。1192年、宮下源太夫義仁、書き写す。

漢字も聖徳太子の時代は秦字といった。

死後、徐福大神として祀られる。

福地山は相模、甲斐、駿河の三国の境界であることから三国一の山と言われる。

第 8 代孝元天皇の皇子、武内宿禰(たけのうちのすくね)は徐福学を学び、徐福学の門人となり、羽田矢代宿祢と名付けられた。

第 10 代崇神(すじん)天皇の時、天照大神を不二高天原から大和の国笠縫(かさぬい)の里に移す。それまでは三種の神器を不二高天原から大和朝まで携行して皇位継承の式典が行われたが、このとき以来式典に必要な器具が召し上げられ、家基都は朝廷から軽視されるようになる。

第 11 代垂仁(すいにん)天皇の時、阿祖山神社を山村の上の大塚に分ける。かつての山室村。大室山周辺。神座。現在の天神山、天神峠下。後に噴火で埋没。その後、富士宮と山梨の浅間神社を創立。

第 12 代景行天皇の時、東軍、神都再興を計り、東北の国々より軍兵を集め、帝都に攻め上り、帝都を攻め潰し、天皇を守護してきて福地山高天原に神代の神都の再興を計ろうとした。西暦 110 年頃。

ところが景行天皇の皇子、小宇須命(こうすのみこと)に滅ぼされた。日本武尊(やまとたけるのみこと)。富士山北麓が戦場となる。剣丸尾、供乱原は戦場の名残。しかしこれより東北の国々は穏やかならず。

日本武尊はその後、東北を討伐。不二高天原に戻り、坂下の宮に美夜受姫(みやづひめ)と子をもうける。妻の橘姫(たちばなひめ)、相模から上総に向かう船から海中に入る。日本武尊は草那芸(くさなぎ)の剣を姫に渡す。子は長田王。熱田大明神、長田王を祭主に。尾張源太夫という。尾張源太夫子孫、信州大河原にて戦死したり(1424 年)、信州浪合にて敵に襲撃されて負傷(1435 年)。

第 16 代、仁徳天皇の時、再び戦いとなったが和睦し、日本国中央に帝都は定め置くこととし、福地山高天原は神代に復し、神都と定め、福地山一円は昔と同じように神地と定めることとなった。

第 18 代反正天皇の時、高天原の神霊を諸国へ遷座。天皇に功を立ててその国を賜った子孫が高天原から祖先の霊を領国に移し祀った。

天児屋根命の霊を河内の国にへ。

第 20 代安康天皇の時、白山姫の霊を越前国に。石凝姥命の霊を紀伊国へ。建御名方命の霊を諏訪国へ。

第 32 代崇峻天皇の時、厩戸皇子（聖徳太子）18 歳、勅使として来麓。『富士古文献』を宮司の宮下元照より見せられ、初めて知り、驚く。文人の秦河勝を太子の側近者にし、『旧事記』を完成。記紀の種本となる。

第 38 代天智天皇 10 年、藤原物部麻呂（藤原不比等？）も『富士古文献』を書き写している。

第 42 代文武天皇の時、寒川明神という名前はふさわしくないとして、福地八幡大神と改称。場所は坂下の宮に沿ったところ。

第 49 代光仁天皇の時、阿祖山神社を先現大神と改称。

9、　平安時代の富士山噴火から南北朝時代

延暦 19 年（800）、貞観 6 年（864）の北富士亀裂帯噴火により家基都ほか埋没。里宮として山梨の一宮に浅間神社が移転。また寒川（桂川）、相模川の河口に沿った高座郡に寒川神社ができる。

阿祖山太神宮は放棄して分散。上吉田の富士浅間神社に宝物の御神鏡。下吉田には小室の名前が移され、護良親王の頭髪、聖徳太子の木像、新羅三郎義光の木像。

第 51 代平城天皇の時、福地山の文字を富士山と改称。神社の名を富士山元宮七社大神と改め、再建することを征夷大将軍坂上田村麻呂を使者に宮下宮司に命じた。

第 55 代文徳天皇の時、社格を従一位大社に。延喜式に記載の甲斐国明神大の大神。

第 56 代清和天皇の時、貞観 6 年の噴火の翌年、前年焼失した 7 社のうち、4 社の宮の再興創立を勅す。

相模国高座郡寒川神社と、甲斐国山梨郡神山浅間神社を里宮神社という。
富士高天原の元宮先元明神大社と七社大神は両里宮の大宮司の受け持ちとなる。

そのためこれを二所明神大社、山宮神社という。

新羅三郎義光。遺言により福地八幡大神の社に。

1193 年、鎌倉幕府、不二のすそ野で巻狩りを行う。源頼朝も小山町、籠坂を経て忍野村の内野に狩り込み。曽我兄弟の仇討ち。

旧社地の石の洞は鎌倉時代のもの。

1322 年、後醍醐天皇を大元帥とする 8 将団の決議密約。河内国の楠木正成の館で藤原藤房、宮下義勝、楠木正成の三者会談の結果、皇政復古の運動を全国に展開することが決まる。さらにその年、全国 8 将が集まり、部署を決定。鎌倉の北条幕府を討滅後、南朝擁立の基となる。

大元帥　後醍醐天皇
副元帥　護良親王
副帥　藤原藤房
西表大将　楠木正成
東表大将　北畠親房
裏大将　宮下（富士三浦）義勝
副将　井伊遠江介道政
　　児島備後守範長
　　河野伊予介道長
　　菊池肥後守武時
　　名和長重
三僧　骨山和尚、宗峰和尚、恵玄和尚

富士三浦義勝は新田義貞とは義兄弟。

征夷大将軍宗良親王は富士谷の東宇津峰城を根城に、信濃、上野の間に隠れ居た尹良親王も浪合村で討たれたのち、高座山に葬られた。

南北朝時代、足利方の千葉兼胤が龍箇河原で文書を焼き捨てる。しかし折りからの雨で焼け残る。

寛文年(1668)、富士文献は密封され、隠ぺいされる。
明治 16 年(1883)開封。　（おわり）